

2023年横浜ナザレン教会・復活後第五主日(5/14)礼拝

「真の命へと向き直る」

使徒言行録第十一章 1 節から 18 節

【聖書】

使徒言行録 11:1 さて、使徒たちとユダヤにいる兄弟たちは、異邦人も神の言葉を受け入れたことを耳にした。

2 ペトロがエルサレムに上って来たとき、割礼を受けている者たちは彼を非難して、3「あなたは割礼を受けていない者たちのところへ行き、一緒に食事をした」と言った。4 そこで、ペトロは事の次第を順序正しく説明し始めた。5「わたしがヤッファの町にいて祈っていると、我を忘れたようになって幻を見ました。大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、天からわたしのところまで下りて来たのです。6 その中をよく見ると、地上の獣、野獣、這うもの、空の鳥などが入っていました。7 そして、『ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい』と言う声を聞きましたが、8 わたしは言いました。『主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は口にすることがありません。』9 すると、『神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない』と、再び天から声が返ってきました。10 こういうことが三度あって、また全部の物が天に引き上げられてしまいました。11 そのとき、カイサリアからわたしのところに差し向けられた三人の人が、わたしのいた家に到着しました。12 すると、“霊”がわたしに、『ためらわないで一緒に行きなさい』と言われました。ここにいる六人の兄弟も一緒に来て、わたしたちはその人の家に入ったのです。13 彼は、自分の家に天使が立っているのを見たこと、また、その天使が、こう告げたことを話してくれました。「ヤッファに人を送って、ペトロと呼ばれるシモンを招きなさい。14 あなたと家族の者すべてを救う言葉をあなたに話してくれる。」15 わたしが話しだすと、聖霊が最初わたしたちの上に降ったように、彼らの上にも降ったのです。16 そのとき、わたしは、『ヨハネは水で洗礼(バプテスマ)を授けたが、あなたがたは聖霊によって洗礼(バプテスマ)を受ける』と言っておられた主の言葉を思い出しました。17 こうして、主イエス・キリストを信じるようになったわたしたちに与えてくださったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったのなら、わたしのような者が、神がそうなさるのをどうして妨げることができたでしょうか。」18 この言葉を聞いて人々は静まり、「それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ」と言って、神を賛美した。

1 愛を学ぶ実践例

先月末の教会総会で「横浜ナザレン教会は、“愛することを学び続ける教会”を目指したい」と発言しました。愛するとは、相手を大切に思い、相手にとって良いことを言ったりしたりする事。ですが、何が相手にとって一番良い事なのか、と判断に迷うことが殆どです。相手が欲する事をするのが良い事か、というと決してそうとは言えないからです。甘い物が好きな

子どもに、本人が欲しがるとまに甘いものを与えていいわけはありません。

さて、この一年間、礼拝で御一緒に聴いている使徒言行録は、「何が相手にとって一番良い事なのか」という問いかけに実に具体的な道を示してくれる、とても実践的な書物です。使徒言行録では、復活の主イエス・キリストは、冒頭の第一章の前半にしか登場しません。使徒言行録が始まるやいなや、天の父なる御神の御許に帰って行きます。地上に残された主の弟子達は、私たちとよく似た人間、神や、この世の人々、教会の仲間を愛する事に悩み迷い葛藤します。そんな彼らが、み霊なる御神に導かれ助けられ、イエス・キリストの証人として成長し、キリストの愛を伝え神の国を宣べ伝えて行く様子が描かれているのが、使徒言行録です。私たちは、彼らの言葉と行いから、愛するとはどういう事なのか、多くを学ぶことができます。今日の聖書、使徒言行録第11章1節から18節もそうです。使徒たちがどのように主イエスを愛し、仲間を愛し、この世を愛したか、御一緒に見ていきたいと思えます。

2 エルサレム教会の反発

使徒言行録が描く時代、ユダヤの人々の間では、ローマ帝国に対する反発がますます高まっていました。ユダヤの人々は、「自分たちこそ真の神の民だ」という自負があります。そんな自分たちが、真の神を知らないローマ帝国に武力で支配されている事に、屈辱を覚え、反発していました。自分達が蔑ろにされている、というのは、唯一の神が蔑ろにされている事、ユダヤの人々には到底許せることではありませんでした。自然と、ユダヤでは、割礼を受けているユダヤ人と無割礼の非ユダヤ人を徹底して峻別し、外国人を排除する、排他的な民族主義が盛んになります。当然、エルサレム教会も、その影響から無縁ではられません。

また、できたばかりの教会では、食事を共にする事が、ユダヤ教以上の重要な意味を持っていました。現代の教会に生きる私たちは、礼拝の中で共にする「聖餐の食卓」を日常的な食事と一緒にする事はありません。しかし、初代教会では、聖餐と日常的な食事とはっきりとした区別はなかったようです。初代教会の食卓は、まず第一に、主イエス・キリストが定められた主イエスのお体を分かち合う聖なる食卓であり、初代教会で、食事を共にする、とは、教会の仲間として受け入れる、イエス・キリストの体の一部に迎え入れる、という事を意味しました。ですから、エルサレムの民族主義的な傾向の強いユダヤ人キリスト者達は、使徒ペトロが、無割礼の穢れた者達、と彼らが思っていた異邦人達と一緒に食事をする、という事は、とりもなおさず、主のお体を汚す許されざる事、と受け取ったようです。ですから、彼らは、「異邦人も神の言葉を受け入れた」という知らせを聞いても、喜ぶことができませんでした。

ルカは、ペトロがたまたまエルサレムに上って来た時に、エルサレム教会の人々がペトロをこの件で非難した…と書いています。しかし、実際、エルサレム教会は、この件について

ペトロを非難するために、エルサレムに来るように、とペトロを呼びつけたのではないかと私は思います。ペトロは、12節で「ここにいる六人の兄弟」と言っています。この六人は、ヤッファからカイサリアのコルネリウスの家までペトロに同行した兄弟たちで、ヤッファ教会の教会員。ペトロが彼らをわざわざエルサレムまで連れてきて証人としている、のは、ペトロのエルサレムに上った目的が、一連の出来事に関係しているのは明らかです。外国人を教会の仲間としたことに対するエルサレム教会の反発がペトロを弁明に走らせるほどに激しかったことを示しています。

3 ペトロの弁明

いきり立つエルサレム教会の仲間を前に、ペトロは、第10章で描かれている一連の出来事を、ペトロの目線で順序だてて語り直します。不思議なことですが、ルカは同じ話を記すのは、これで三度目です。一度目は最初に起こった時、二度目はカイサリアでコルネリウスとペトロが互いの幻を語り合った時、そして、今日の箇所。ルカは、ここで、「ペトロは、ヤッファとカイサリアで起こった出来事をエルサレム教会の兄弟たちに語った」とまとめる事もできました。ですが、そうはしませんでした。何故でしょうか。

コルネリウス達に聖霊が降り、彼らが教会に加えられたことが、教会の歴史上、つまり、世界の歴史の上で大きな転換点となったから、何度繰り返し語っても足りない程の一大出来事であったからでしょう。語りなおすことで、新しい発見があり、新しい強調点が出て来る、だから、ルカは何度も語ります。

今日の聖書での強調点は、外国人が教会に加わったのは、神の御旨であった、という事だと思えます。この物語の主人公は、間違いなくペトロでもコルネリウスでもありません。全てのシナリオを書き、実際にストーリーを前に推し進めていったのは、ほかならぬ全能者、唯一の天の御神です。全て神がおぜん立てをされた物語。

ペトロがそのように確信しているのが窺える表現があります。5節から10節まで、私たちにはずっかりお馴染みになったペトロの幻が描かれています。多種多様な動物や鳥が入れられた大きな布が四隅をつり下げられて天からおりてきた所で、ペトロと「天の声」との対話が始まります。「起きて、屠って食べよ」と言う天の声に対して、「主よ、汚れた物は食べたことはありません」とペトロが答えると、「神が清めた物を、清くないなどとあなたは言うてはならない。」と再び声があった、この対話が三度繰り返され、大きな布は天へと引き上げられます。そして、その直後の11節。新共同訳聖書の訳では省略されていますが、原文では、11節の最初に「ほら、見てごらん。そのすぐあと、直後のことだ。」というギリシャ語があります。これは第10章で語られた時には見当たらない表現です。まさに、幻が終わった絶妙なタイミングで、コルネリウスが遣わした三人がペトロを訪ねて来た。「ほら、見てごらん。そのすぐあと、直後のことだ。」という言葉には、「神がなさったのでなければ、このようなタイミングになる筈はありません」と言いたいペトロの気持ちが表れています。

4 命に至る悔い改め

それにしても、私が感心するのは、ペトロが、エルサレム教会の仲間の一方的な非難に、非難で返すことをしていない事です。ペトロは一切、エルサレム教会の兄弟たちの言動について何も意見を言わないし、非難もしません。彼こそ、主イエスの最も身近にいて、主と行動を共にして、誰よりも地上で生きた主イエスを知っていた人、使徒の代名詞のような存在。その使徒筆頭の権威をもって、教会組織を守りたいばかりにこの世に流されてしまうエルサレムの仲間たちを糾弾する事はできたのではないだろうか、と私は思います。

しかし、ペトロはそうはしませんでした。エルサレムに上る途中のペトロは、祈りに祈ったのではないか、と思います。そして、彼は自分が為すべき事を教えられました。それは、ただひたすら、割礼を受けていない異邦人でも、主イエスをキリストと信じ受け入れた時、聖霊が降ってくださった、私たちと同じ賜物を、神は異邦人にも与えてくださった、この神の出来事を伝える事でした。はっきりと、主イエス・キリストは、ユダヤ人だけでなく全ての人の主である事を証しする事だけをしよう、ペトロはそのように決心したのではないか、と思うのです。このように、主イエス・キリストを伝える、証しする、これこそ、教会とそこに連なる私たち一人一人が成すべき愛の業だ、と今日の物語は私たちに語っているようです。つまり、相手にとって、教会の仲間や家族、この世の人々にとって、最良の事とは、自分の意見や自分自身を示すことではない、聖霊なるみ神の御力を祈り求めつつ、主イエス・キリストを言葉と行いで伝えて行く事、ではないでしょうか。

何故なら、主イエス・キリストこそ、御自身と敵対する私たちの為に、その命を投げ出し、贖いだしてくださった方、神からの救い主であり、神の義と愛、愛と義が完全に現れている方。この主イエス・キリストを知り、主の十字架と復活の愛の内に歩む以上の幸いな命はないからです。

この事は、今日の聖書にもしっかりと描かれています。18節。「**それでは、神は異邦人も悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ**」。しかし、他の訳は次のように訳して「**それでは、神は異邦人にも、命に至る悔い改めを与えてくださったのだ**。」どちらともとれるギリシャ語ですが、私は、「命に至る悔い改め」と訳す方が的を得ているのではないか、と思います。

では、「命に至る悔い改め」とは何でしょうか。私たちは、悔い改めを、反省や懺悔、後悔と同じように勘違いする事があります。確かに反省や懺悔を含む場合もあるでしょう。しかし、悔い改めは、もっと大きい変化、「方向転換」、生き方の、命の方向を変える事だ、と言われています。神の方を向いていなかったけれど、神の方へと向きを変える事を言うのです。

主イエスの有名なたとえ話の一つ、放蕩息子の話の中に、うらぶれ果てた弟息子が「そうだ、父親の家に帰ろう」と、踵を返す場面があります。あれこそ悔い改めです。自分の欲望

ばかりを追い求め生きていた弟息子が、父親の方へと向き直った、方向転換した瞬間です。ですから、悔い改めを「回心」と言う事もあります。

そして、「命に至る悔い改め」という時の「命」が肉体の命でない事は明らか。ここの「命」とは、霊的な命、全能者である神としっかりと結びついた真の命、つまり、死を超えた永遠の命、と言ってよいのです。主イエス・キリストを通じて、神の方に向き直って生きる、これこそ、まさに真の命に向き直ること、神が喜ばれる命へと向き直ること。命の造り主である神が「真によい」と喜ばれる命だからこそ、真に幸福な命です。キリストを証しし、真の命へと方向転換するよう、ひたすら招く事こそ、私たちがなす愛の業ではないか、と思います。

しかし、忘れてならないのは、この真の命へ向かわせる方向転換、悔い改めを、人間が与える事はできない、と言う事です。愛は、何よりも相手の自由意思を尊びます。自分の思い通り動かそうというのは、愛ではありません。18節の「悔い改めを神が与えた」という表現でもそれが分かります。方向転換を起こしてくださるのは、神御自身、だからこそ、悔い改めは、神の恵みの御業、つまり、奇蹟です。私たちは、聖霊なる御神の力を借りて、父なる御神に祈りつつ、十字架の愛の主イエス・キリストに生きて、主の証人となり、自分の言葉と行いで、主イエス・キリストを人々に伝えて行くこと、これこそ、私たちが為す愛の業です。

5 教会も悔い改める

そんな私達に、悔い改めが与えられるのは、一度だけではありません。この出来事で、方向転換させられたのは、コルネリウス達外国人だけではない事からそれが分かります。ペトロにも悔い改めが与えられました。「神は分け隔てなさらない方だという事が分かりました。主イエス・キリストは全ての人の主です」とペトロも気づかされ、方向転換させられています。聖霊なる御神が私たちの内に下ってくださったからと言って私たちは、神ではありません。神の方を向いて生きているつもりでも、いつの間にか、自分達の立場を正当化し、自分たちの意見や立場を神の正義だと混同してしまふ。知らないうちに自分たちに都合のよい自分達の義へと向きを変えてしまふ、そちらに進んでしまふ事が本当に多いものです。私達もエルサレム教会の人々と同じなのです。

天の御神は、聖霊なる御神を通じて、そんな私たちに気づきを与え、御自身の方へと向き直させてくださる。では、聖霊なる御神は、どんなふう私たちに気づかせてくださるのか。コルネリウス達に聖霊が降る出来事を目撃したペトロは次のように言っています。「そのとき、わたしは、『ヨハネは水で洗礼(バプテスマ)を授けたが、あなたがたは聖霊によって洗礼(バプテスマ)を受ける』と言っておられた主の言葉を思い出しました。」主イエス・キリストの言葉を思い起こす事で、ペトロは、「ああ、主が仰っていたことはこの事なのだ。自分たちの上にも起こった聖霊降臨の出来事は、聖霊によるバプテスマであったのだ。異邦人の上にも自分たちと同じように、あの主の約束が、今成就している。十字架と復活の主イエスの約束は、全ての人間への約束なのだ」と確信しました、主イエス・キリストの愛の大きさ、強

さをより深く知り、神の義を新たに発見したペトロ。そして、神の義の方へと向きを変えることができました。最初、ペトロを非難していたエルサレム教会の仲間たちも、このペトロの言葉から、主イエス・キリストを思い起こして、自分たちの正義から神の義へと方向転換できたのではないのでしょうか。

ですから、「愛を学び続ける教会」というのは、主イエス・キリストを思い起こし、神の方へと向き直り、主や神について学び続けること、悔い改め続ける教会、と言えるのです。愛を学び続ける教会は、自分たちを正当化し、自分たちの考えに固執する教会ではありません、過ちを神から示されれば、御前に額ずき、神に許しを乞い、そして、悔い改めを与えられて再び立ち上がって歩み始める教会、そのような人々の集まる教会、と言ってよいのではないか、と思います。聖霊の御力に助けられつつ、何度でも主の方向に向きを変え続ける歩みが、私たちに真実の命へと導く、と聖書は語っているようです。

仲間と共に、主イエスを証ししつつ、真の命への道を進んで行きたい、と切に願います。